国際シンポジウム一
《講演録》ツクシ舞と阿曇磯良

浄見　譲

ただいまご紹介を賜りました、宮地嶽神社の宮司を務めさせていただいております浄見と申します。ご案内の中に、コロンビア大学を出たとお書きいただいたんですが、私は國學院大學を卒業した後にアメリカに行ってしまいまして、アメリカでずっと生活するのかなと思っていたんですけれども、私の兄が急逝しましたので、急遽帰って宮司をしなければいけないということで、そこから宮司の勉強をさせていただきました。まだまだ自分の学問のなさといいますか、いろいろなことを恥じながら、勉強させていただいております。

私ども宮地嶽神社については、ちょうどここに出ているんですけれども、先ほどお話しいただいた岩屋、古墳については、二八〇年ほど前に鳴動があって山が崩れて、この古墳が出てきたという記載がございます。そこから岩屋の中に不動がお祭りされた。私どもの神社には修験者がたくさんお参りいただいていたので、その人たちから不動を祭っていただいて、今日でも不動信仰が非常に強いところでございます。

この古墳の横穴式石室は、奥行が十三メートルございます。それから、中に十三個の大きな石が組んでございます。その一個が大体二メートルから四メートルの大きさの石で、これを十三個組んでございますので、サイズ的には日本最大級でございます。

横穴式石室

では、なぜあまり宣伝しないのかということになりますと、ここ自体は信仰の場所なので、「ここはすごく立派な古墳なんですよ、ぜひご覧ください」ということになると、皆さん中に入っていただかなければいけなくなる。神様を中にお祭りしているので、それはあまり良くないだろうということで、先代、先々代がここには入らないようにと、入り口に蓋をしまして、一月二十八日と二月二十八日、それから七月二十八日の、年に三回だけ中にお入りいただいて、お参りしていただけます。

さて、私どもと、特に東京に住んでいらっしゃる方々と感覚的に違うところですが、朝鮮半島がもう本当に目の先にあります。福岡から広島に行くよりも、釜山に行ったほうが近いです。広島まで、車で行くと大体四、五時間かかるんです。朝鮮半島までは、釜山までビートルという船が出ています。これが時速大体七〇キロから八〇キロで走るんですけれども、この船に乗っていきますと、大体一時間半で朝鮮半島に着くんです。もう朝鮮半島が非常に

近いので、我々の生活の中にも、いろいろなところで朝鮮との繋がり、韓国との繋がりは強いです。

富山大学のある先生が来られて、「宮地嶽のこの近辺では、海藻のことを何というの」とおっしゃるから、「私のところでは海藻のことを藻というんですよ。ホンダワラという海藻があったり、ワカメという海藻があったり、全部の海藻をひっくるめて藻というんです、」と。そうしたら、韓国語でも海藻のことは「モー」と発音して、同じ発音だそうです。またそれを食する民族が特に九州には多いということで、ご存じかもしれませんけれども、オキュウトという九州独特の海藻を食べたり、もちろんヒジキ、ワカメ、こんなのはもう常食としていたりする人たちがたくさんおります。

では、北部九州は大体どういう感じの所かということを申し上げます。北部九州の地図を思い浮かべていただくと、北九州から唐津までが、一五〇キロぐらいあるんですけれども、この一五〇キロが白い砂浜です。そこに波が打ち寄せるんですが、ちょうど秋口になりますと、北西の風が非常に強く吹いてまいります。そうしますと、大陸からいろいろな文化が船とともに押し寄せてくるわけでございます。当時で三十人ぐらい乗った船が渡ってきます。今から二五〇〇年ぐらい前のお話でございます。そのころ日本列島はもっとスリムで、海岸線ももっと内側に入っていた頃だと思います。我々の所ですと、今よりも二〇〇メートルぐらいは海岸線が内側に入っていた時代でございます。

その頃に船が港に着きます。港といいましても、海岸線でございますから、海岸線に上がってまいります。当時の船は底が平べったい船ですので、白い砂浜にざあっと船が上がってくると、もうそれがいい港だということで、たくさんの文化がここに押し寄せてまいりました。

この中にいろいろな文化があるんですけれども、私どもの神社の、先ほど申し上げました古墳の中から、三三〇ほどの文化財が発掘されました三三〇のうちの二〇点だけ国宝の指定を受けております。国宝指定ということは、一点

一点の国宝の指定でございますので、物として非常に素晴らしいものですという認定を国から受けたということになります。そういう国宝が二〇点ほど出ております。

その中に鐙というのがございます。この鐙にパルメットという模様が描いてございます。パルメットとは何かといいますと、つたでございます。泥棒がよく風呂敷を背負いますね。唐草模様といいますけれども、あれがつたの模様でパルメットというものです。このパルメットの模様が、古墳から発掘された鐙に描いてございます。これはいつの時代のものかというと、七世紀ぐらいのものだろうということです。したがいまして、七世紀ぐらいにはもう既に我々のところには素晴らしいパルメットの文様が輸入されていたということになります。

『古事記』の編纂が大体一三〇〇年ぐらい前だということですから、一三〇〇年以上前の話でございます。二五〇〇年から七〇〇年ぐらい前の話でございますので、大和朝廷が日本にできた、神武天皇様が国を平定されたというのが、皇紀でいえば二六七七年前ですから、二六七七年と一三〇〇年とでは随分差があるんですけれども、『古事記』が編纂された以前の話にどれだけの本当のことが書いてあるのかは、こちらの皆さん方の研究材料でしょうし、これは勉強していただかなければいけないことなんでしょうけれども、私どもが実際日々のお祭り、生活、芸能の中からいろいろなことを感じ、学び、聞き、教えてもらうことが、今から一三〇〇年以前の話でございます。

そういう話の中で、船がどおんと港に着きます。港に着いたときに、船で来るには三週間ぐらいかかりますから、三週間ほど船の舳先に人が縛りつけられてくるんです。これは汚れ人といいます。飲まず食わずで三週間ずっと船の舳先におりますので、もう体がどろどろに汚れています。多分いろいろな汚いものもそのまま出しっ放しでしょうから、汚れています。そういう汚れた人が船の舳先についてきまして、港に着くと、まずみんなが上がる前に、舳先に結びつけ

られた人を水の中にぽちゃんと落として、綺麗にしてから陸に上がってきてもらいます。今、神社にはこれが禊という格好で文化が残っています。

世界遺産になろうかといっております沖ノ島というところがあるんですが、この沖ノ島に上がる時には、今でもその禊をしませんと、上がることはできません。だから、上陸するときには汚れ人をまず綺麗に洗って上陸してくることが習わし、決まりごとであったということで、今日までそういう形でも残っております。

先ほど申し上げました白砂の浜に松の木がずっと植わっているんですが、この松の木は、古くても二〇〇〇年ぐらいの松です。そんなに古い松の木はありません。なぜかといいますと、二五〇〇年以上前に朝鮮半島から、俗にいう弥生人、海人族の人々が松の木を携えて渡って来られまして、これを海岸線に植えました。

では、なぜ松の木だったのかといいますと、当時は松の木が一番大事な木とされていました。松の木の中の芯、「ジン」というんですけれども、このジンを結んで火を灯せば、松明になりました。火が非常に大事な時期で、松の油を火に使っておりました。また、これを燃やすと煤が上がります。この煤を集めたものを入れ墨とか、書道の墨、松の墨、松煙といいまして、ちょっと青っぽい墨になります。

話はがらっと変わるんですけれども、ツタンカーメンとかクレオパトラは、皆さんよくご存じですよね。ツタンカーメンとか、クレオパトラの目を見ますと、目の下、上に、ちょっと青みがかった入れ墨をしていますね。ツタンカーメンの黄金のマスク等々を見ますと、くっきりと綺麗に描いてございます。この目のことを阿曇目といいます。

朝鮮半島から渡って来られた海人族の中に、阿曇族の人たちもたくさん渡って来られました。阿曇族は、みんな目の下に阿曇の入れ墨をしていた。ほかには、宗像族がいます。宗像族は、漁労の人たちだったので、胸に船の形の入れ墨

がついていたのであろうということで、宗像と言われているようでございます。

そういう人々が渡って来られる時には、いろいろな文化を持っていらっしゃるわけです。その一つに、音楽があったと思います。ただ残念かな、音楽の歴史はいま一つよくわかっていません。昔はどんな楽器を使っていたのかもよくわかっていません。わかることは何かというと、土偶の中に琴を持ったお人形が出ています。これは大体六世紀から七世紀なので、その頃には琴があったのだろうと言われています。

これも歴史の話で、『古事記』の中に書かれていることから推測しますと、神功皇后が託宣される時に琴が出てくるんです。神功皇后さんがいらっしゃる時期は大体二〇〇年代ですから、三世紀ぐらいです。その時代の音楽なのか、それよりももう少し後なのか、琴が楽器の一つとしてあったということぐらいしかわかっておりません。私どもに伝わっております音楽も琴を使っておりますが、それも当時の本当の一絃とか、二絃とか、三絃ではなくて、今、日本で使われている六絃という琴と十三絃という琴を使わせていただいております。

別名ツクシ琴という琴が有名になって、これを生田流の琴とともに、今日では十三絃の音楽がたくさんあるんですが、その原型としては今申し上げましたように、一絃か二絃か三絃の琴がもともとの姿だったと認識しております。

そういう中で、我々は音楽を口伝、言葉伝えで教えていただいて、勉強させていただいて、伝承させていただいています。これをツクシ舞といっております。ツクシ舞の「つくす」とは、領土をつくるという言葉の中から出たと私は聞いております。

お祓いの中で、「筑紫の日向の橘の……」という言い方をよくするんですが、国をつくった筑紫の日向は、私どもの神社から車で約十五分行ったところにございます。

今、日本の歴史の流れというのは、大和朝廷が奈良にあって、大和朝廷からの出発というイメージなんですけれども、私ども九州人は考え方が若干違っております。二〇〇〇年ほど前にはもう九州に一大都市があって、それがどんな都市だったかわからないけれども、そこには大文化圏があったんだと認識した上で、我々はいろいろな勉強をさせていただいております。

したがいまして、神功皇后伝承が非常に強い北部九州に、三世紀ぐらいからいろいろな文化が伝わってきた。三世紀の神功皇后伝説の中に、阿曇磯良という人が出てくるんです。どういう人かというと、舞の名人であったけれども、神功皇后のお召しによってもなかなか出てこなかった。それで何とか呼び出して舞を舞わせたところ、顔に覆面をしてきた。顔に貝殻とか、海藻がついてとても醜い顔をしていたから、覆面をつけて出てきた。

この舞が磯良舞として今日でも残っている。その舞は、今申し上げましたように、ツクシ舞という形でも残っている。それから、奈良の春日大社で、十二月十七日に春日若宮おん祭りという祭りがあるんですけれども、この祭りの中に、細男（せいのう）の舞があります。これはただ鼓を叩いて、四角い舞台を回るだけなんですが、今はもうそれしか残っておりません。それから、大分県にすぐ近い福岡県の境ぐらいのところにある吉富町には人形で舞わせる細男（ほそおもて）の舞というのも残っております。こういうことで、磯良が舞ったと言われる舞は非常に立派な舞であった、日本の舞の起源であったということで、私どもにもいろいろな調査をしていただいています。

この阿曇磯良が舞っていた舞は秘舞なので、神社でしか舞ってはいけないということだったんですけれども、まあ、いいかなということで、今日は舞わせていただきます。今日はいろいろなことを勉強している方がいらっしゃるんだろうから、福岡まで来ていただくのは大変だろうから、ここで見ていただこうと。神様にお許しをいただいたら神様も黙っていらっ

しゃったので、これで許していただけたんだなということで、最後にここで舞わせていただこうと思っています。これは一応宮司しか舞ってはいけないということで、私しか舞えないので、私もその次の代に何とか伝えていかなければいけないなという認識を持ちながら、最後に舞わせていただくつもりでございます。ぜひご覧になっていただければと思います。

春日さんの話になります。春日大社のおん祭りの中に、細男舞があります。田楽舞があります。それから、舞楽、雅楽、いろいろな舞があるんですけれども、これは日本の芸能史の中では一番大切なところでございますので、それももし機会があったら、ご覧になっていただければいいと思うんですが、芝の舞台の上で舞います。

それから、一の鳥居を入ったところに影向の松という大きな松があって、その下に春日大社の宮司さんが座られて、こんな芸能を奉納しますという。猿楽の一座とか、田楽の人々の舞をそこでご覧になっていただくんです。その姿が今日まで残っていまして、今でも能舞台では必ず松の絵が描いてございます。この松の絵が、いま言いましたように素晴らしいものでございます。この松はどこから来たかというと、朝鮮半島から入ってきた松でございます。したがいまして、奈良の文化にあります松の木も、私どもの所に植えられた松の木も、同じ文化の中で育ってきた松の木であろうと思っております。

春日さんの神様の中で、武甕槌命と比売神と天児屋根命という方がいらっしゃいます。武甕槌命というのは、鹿島から鹿に乗っていらっしゃったというんですよね。

ところが、これとは別の説として、阿曇磯良が祭られた志賀海神社というところがあります。この志賀海神社に行きますと、鹿の角がたくさん奉納してあるんです。今は海の中道というところで繋がっていますけれども、以前はそこが一つの島で、そこには鹿がたくさん棲んでいたというんです。そこから武甕槌命は鹿島立ちをされて、奈良の春日さん

に行かれたという説もございます。それはもしかしたら、鹿島からいらっしゃったかもしれないし、こちらから奈良に行かれたのかもしれません。

地名には、同じような名称がございます。福岡にも三輪というところがございますし、大和というところがございますし、福岡と奈良は近い名称のところがたくさんございます。それが勉強の中でわかってくればいいんですけれども、どういうことなのかということをつらつら思っています。そういうものの中から、私は磯良舞を舞わせていただいています。

この磯良というのは、先ほど申しましたように、神功皇后の話の中に出てきますので、三世紀ぐらいの方であろうと思います。私どもの古墳が七世紀ぐらいにできたであろうということになると、そこで三〇〇年から四〇〇年ぐらいの歴史が流れているんです。その三〇〇年、四〇〇年の歴史の中にどういうものがあったのかなというと、ご存じのように、筑紫磐井の乱がございます。

筑紫磐井というのは、ツクシ舞のツクシと同じなんですけれども、北部九州を平定していた阿曇族の長です。筑紫磐井が乱を起こしたというんですけれども、そうではなくて、平定されて、大和朝廷から押さえられてしまった。だから、いいものは全部大和朝廷に取られてしまったと私どもは考えております。したがいまして、そこからは日本という国が一つになって、なおかつ『古事記』『日本書紀』等々で日本という国を一つにまとめていったんだろうなとつらつら思います。

これは九州人が言っている戯言だと思ってお聞きいただいて結構でございますが、北部九州のほうではそういうことをおっしゃる方がたくさんいらっしゃる。そういう中で私どもも祭祀をやらせていただいています。

それで、筑紫磐井にカツコというお子さんがいらっしゃったんです。そのカツコというお子さんは双子の兄弟だったと言われております。カツコは、諸葛孔明の「葛」という字を書いたということでございます。当時のことですから、

漢字は当て字だと思っていただいて結構でございますけれども、私どものご祭神が神功皇后様と勝頼、勝村という神様でございます。勝頼、勝村の神様は双子の神様だったということが伝承の中にございます。したがいまして、筑紫磐井のお子様のカツコのご兄弟を合わせ祭ったものが宮地嶽神社であり、宮地嶽神社の古墳であると思っております。

磐井の乱でたくさんの阿曇族が故郷を追われます。その時にどこに行ったかというと、渥美半島に来ました。名称が渥美、渥美半島になりました。それから、長野に行きました。安曇野に行きました。阿曇の人たちが日本全国に散らばっていきました。

その人たちのＤＮＡの中には、何らか、私どもの神社から見えるような夕日が心の中に刻まれていたのかもしれません。私どもの地元ではこういう光景を毎年、年に二回、二月二十日と十月二十日前後にご覧になっていただくことができます。地元だけの楽しみだったんですけれども、去年たまたま日本航空さんがこの絵を使いたいとおっしゃったので、お使いいただきました。嵐というグループが来て、この宣伝をしてくれたんですが、それ以来、たくさんの人が押し寄せてこられまして、いろいろと大変でございます。

何が大変かといいますと、一〇〇メートルぐらいの階段がございますが、そこに皆さん方がずらっと座ってご覧になるんです。だから、階段が非常に危ないんです。ですから、ガードマンを雇うのが大変でございます。

素晴らしい夕日なんですが、ちょうど向こう側に島がございますよね。あれが相島という島です。相島の向こうに太陽が落ちていきますから、ご自分たちの祖先が眠るところ、ちょうど向こう側に朝鮮半島があるんです。

地図でご覧いただければいいんですが、真っすぐ行ったところ、ちょうど向こうに渡っていったところに釜山がございます。

したがいまして、あの世に眠っていらっしゃるご祖先様と、白村江の戦い等々で私どものところに移ってこられて、この地で眠る方々が、相島を通じてご祖先同士で会われるというのが一年に二回あるということで、この日は大変ありがたい日として、皆さん方の願いごとが必ず叶うという日でございます。もし機会がございましたら、ぜひ夕日の光の道をごらんになりに福岡までお越しいただければ幸いかと思います。

そろそろ舞を舞いませんと、また次の時間が過ぎてしまいますので、私の話はこれぐらいにさせていただいて、今から三曲舞わせていただきます。

最初は、「秋風の辞」という曲でございます。「秋風の辞」とは、今申し上げました、阿曇の人々が戦に行って、故郷に帰ってきた喜びを舞う舞でございます。その次に、「橘」という舞です。これは女性の舞なので、男性に綺麗な姿の舞を見ていただこうという舞です。最後三曲目に、私が「浮神」という、先ほど申し上げた磯良の舞を舞わせていただきます。どうぞご観覧いただければ幸いです。

長々とお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。

夕日の光の道